

げしゅ 下種の期間～土壁に咲く花を夢見て～ 第2回 引き算の美学

国土技術政策総合研究所
主任研究官 水上 点晴

1923年9月1日、東京湾を震源地とする、日本災害史上、未曾有の被害をもたらした関東大震災が発生した。地震による建物の倒壊で街道は寸断され、十分な消防力が発揮できないまま、同時多発的に発生した火災が東京市街を舐め尽くし、多くの建物が失われた。正にこの時、東京都大田区の大森海岸を望む地に、瓦を並べ、完成間近な状態で建つ洋館があった。この関東大震災、そして後の太平洋戦争による空襲を奇跡的にくぐりぬけ、高度経済成長時の開発からも逃れ、地域のランドマーク的存在として立ち続けた。しかし時代の波には抗いきれず、2008年3月、解体が決まり、それを惜しむ近隣住民に向けた内覧会が開催された。

一方、私は大学卒業で慣れ親しんだ関西の地を離れ、1年の海外留学を経た後、就職で筑波の地に住むこととなった。ちょうど内覧会の頃は、家づくりの夢をかなえるべく、一目ぼれして手に入れた、山おやじ＊が林立する筑波山麓の雑木林で、夜明けを待ちわびながら草刈りを行う毎日であった。（※薪炭林に用いられるクヌギやコナラは、20年周期の伐採のたびに萌芽更新が行われ、その根元は幾つもの洞が見られ、そのゴツゴツした容姿から山おやじと

呼ばれ愛されている。）古株の山おやじが戦友の洋館解体のニュースを風に乗せて我が耳に届けたのか、はたまた洋館が今少し人々の目を楽しませるために、我が身をして移築させしめようと雑木林をあてがったのか、洋館＋雑木林のコンビネーションが妄想の中に立ち現われ、気がつけば内覧会に出向き、「洋館を譲り受け、雑木林に移築したい」と申し出ていた。跡地に建つマンションの建設計画も既に決まっており、解体まで間もない中で申し出は、無謀という他ないと今なら思う。しかしこのとき、肝心の理性は妄想に浸食され、白昼に夢見る有様だったのである。私が何とかせねばと、まるでスーパーマンになったかのようなつもりで、現実、危なっかしさに手を差し伸べた家主を始め、友人、知人、職人方の協力の賜物で、とにもかくにも解体部材を茨城に運び込んだのであった。

ここで移築することになった洋館について紹介したい。外観はドイツ風のハーフティンバー様式であり、室内は建設年から2年後のパリ万博（1925年）で好評を博したアールデコの装飾が随所に見られる。これは建設時の当主がフランスで海事を学んだ海軍の造船総監であったこと、一方で本洋館はドイツで医学を学び、後に台湾帝国病院の院長となる娘婿の住居として建てられたことが影響している。作事に当たったのは日本の大工で、明治の文明開化以後、お雇い外国人によって輸入されたキングポストと呼ばれる洋小屋組や筋交い、ボルト金物が導入されている。また階高が高く、特徴的な親柱で階段が象徴的に扱われている。深い軒が象徴的で水平線が強調される和風建築に比べ、鉛直方向に指向性がみられる。そして客船を思わせる台所の装飾や、当時では珍しく衛生的な大正式浄化槽を備えたトイレなど、施主の専門性を生かした家づくりに対する関与

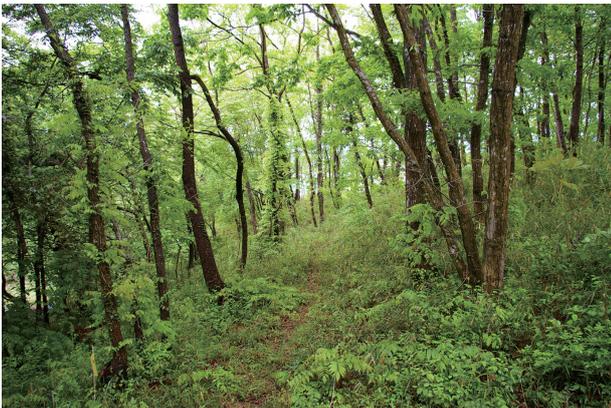


写真 開拓前の雑木林



写真 移築前の洋館

が、随所に垣間見られる。

解体を進めてわかったのだが、外観上の特徴を為すハーフティンバーは構造体と一体でない飾り柱であった。本来の構造体は、高い階高を2分する胴差と、部屋割に即して配された4寸角の柱の他に、忠実なモジュールで1尺5寸毎に配された半割の間柱で構成されており、それだけで十分に美しく、これを隠した上で、装飾的な模倣となることを是とした真意を図りかね、疑問の種が頭の片隅に残ることとなった。これが溶解したのは、わが専門である防火規定を戦前にさかのぼって調べていたときのことである。

今に続く建築規制としての建築基準法は1950年に制定されているが、その前身として、大都市のみを対象とした市街地建築物法が、本洋館が竣工する4年前、1919年に制定されている。この中に、市街地での火災の延焼を防ぐため、建築物の外壁に防火被覆を施すことを求めた規定があり、これにより構造体である木柱を、外観表面に現わすことが規制されていたのである。本規定は、江戸時代からの度重なる都市大火への防火対策として評価される一方、意匠上は、開国後に来日した西洋の建築家が声をそろえて賞賛した、外観上に現れる柱梁の構成美*が失われた元凶と見る向きもある。本洋館を振り返ると、防火対策としてモルタルにより外壁面を覆った大壁を構成しつつ、その表面に施された等間隔の付け柱

が、建物に軽快さと天に向かう鉛直性を与える意匠上の特徴となっており、構造と意匠の専門分化によって、この課題を乗り越えようとする意図がみられた。一方で、日本建築の柱梁の構成美に対する称賛には、視覚上の効果だけではなく、20世紀のモダニズムが指向した「装飾を排除した機能美」、すなわち「ありのままの素材の提示」が既に実現されていたことへの評価も考慮に入れるべきであろう。そこで、都内から筑波山麓への移築により防火地域から外れることを鑑みて、真壁のハーフティンバーへの改変を試みることにした。

柱梁すなわち線材による構成美の基本は、生け花の観点から読み解くに、「引き算の美学」である。西洋のフラワーアレンジメントは、幾多の種類の花々を組み合わせ、マッサ（量）としての美を表現する「足し算の美学」である。日本の生け花にも、立花（りっか）と言って、数種の草花を用いて草木の調和に美を求める生け方もあるが、元来は仏前に備える生花（しょうか）に始まり、1種から多くても3種のみを用いる。そして植物の出生の美を表現するため、脇芽や枝を極限まで切りつめることで、無としての空間を造出し、それを背景として浮かび上がる線の美しさが表現される。植物を柱梁に、無の空間を壁として対比するならば、線である柱梁は、のっぺらぼうな大壁に付け足されるのではなく、化石が骨格を浮かび上がらせるように、壁側を凹ませることで強調されるものでなくてはならない。また白いキャンバスと言えは聞こえはいいが、光を反射する広大な白い壁面は、自然の中では主張が強すぎて、コントラストを強調しこそすれ、どこか2次元的で奥深さに欠ける。黒ずんだ柱梁と雑木林、その双方を引き立てて主張しない壁とは何か——。そんなことを考えていた折、出会ったのが土壁であり、木舞壁であった。

※バウハウスの創立者であり、モダニズムを代表する建築家ウォルター・グロピウスが序文で賛辞を寄せた、1964年出版のハインリッヒ・エンゲルによる「The Japanese House – A Traditional for Contemporary Architecture」参照。